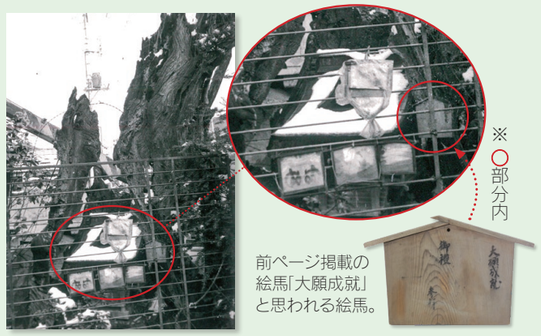
撤去・移転

明治時代の火事のあと、初代の幹のそばに2代目が植えられました。2代目も信仰の対象となりましたが、昭和44年(1969)2月28日に移転などのために伐採されました。なお、初代の幹は現在の板橋区立郷土資料館などへ持ち込まれました。敷地は中山道をはさんだ真向かいに移転し、3代目の榎が槻の木とともに植えられました。

1 昭和43年(1968)2月16日
撤去工事前の縁切榎



前ページ掲載の絵馬「大願成就」と思われる絵馬。

2 昭和44年(1969)2月28日 (撤去当日)
撤去直前。幹、雪をかぶった祠、奉納絵馬などがみえます。絵馬の中には、眼病平癒祈願の「向かい目」、「女性が祈る姿」、そして当館蔵のものと思われる「大願成就」がみえます。

3 昭和44年(1969)2月28日 (撤去当日)
撤去直前。縁切榎が塀の右奥にみえます。

4 昭和44年(1969)2月28日 (撤去当日)
撤去直前。幹、奉納絵馬、立て札、手水舎などがみえます。雪が降り、積雪も確認できます。

5 昭和44年(1969)
2月28日 (撤去当日)
撤去中(幹)。

6 昭和44年(1969)2月28日
(撤去当日)撤去中(幹)。

7 昭和44年(1969)2月28日
(撤去当日)撤去中(手水舎)。

←8 昭和44年(1969)6月5日
移転先(現在地)での植樹

9 昭和44年(1969)6月27日
移転先(現在地)での「修祓式(しゅうばつしき)」。
建物完成後に行う祓いの儀式。

縁切榎歌碑

榎は縁の木なればあながちに縁を断つ
ことのみならず、善縁をむすび悪縁を
たつこそ、神の御心なれ
縁のいとのむすぶもとくも人こころ
誠しあらは神そ守らん
雪迺舎 朮
酒井 亀泉 刻

明治27年(1894)建立。相沢朮(雪迺舎朮(おけらゆきのや))による歌の碑。
朮は、明治初期に板橋中宿に移り住んだ医師で、短歌の指導などもした文人です。
この歌碑も一緒に移転されました。

※①③④⑤ 写真(部分) 板橋区立公文書館蔵
②⑥⑦⑧⑨ 写真(部分) 当館蔵

現在

■現在の縁切榎
(本町18)

■上:縁切榎絵馬
■下:情報保護シール
令和3年(2021)
個人蔵

現在の縁切榎絵馬。「善縁をむすび悪縁をたつ」と書いてあります。また「情報保護シール」も用意されています。
誰もが情報を記録・拡散できる現代社会において、シールを用いた願主の願いごとは、自分自身と縁切榎のみが知ることのできる秘密となります。願う気持ち自体も他者に知られてはならなかった従来とは異なり、「願ってよい」「秘密のままでよい」という、堂々とした祈願が社会に許容されたといえます。干渉されない自己の確立と、自分と縁切榎とが向き合う重要性の高まりがうかがえます。新しい祈願法を受容し、人々の親しみを得る縁切榎の実態がみえます。

■縁リセットみくじ
令和3年(2021)
個人蔵

(表・裏)

現在の縁切榎に関するおみくじ。みくじは神籤と書き、物事の吉凶を占ったり、神仏の声を聞くためもの。

現在の板橋のたもとに多く結ばれ、橋は心願成就の出発点とされています。

令和3年度収蔵品展

Collection Exhibition
Itabashi's Wish/Prayer/Living-Folk Religion, Fork crafts, and Ema (Votive tablets)-

板橋のねがい・いのり・くらし

―民間信仰と民具・絵馬―

無料

絵馬(眼病平癒祈願)

縁切榎図(部分) 大正6年(1917)

牛の面
(赤塚諏訪神社田遊び関係道具)

面(太郎次・安女)
(徳丸北野神社田遊び関係道具)

ごあいさつ

板橋には多くの民間信仰が存在しました。
史跡・縁切榎(えんきりえのき)は「悪縁を切り良縁を結ぶ」とも信じられた板橋宿の名所でした。また区内の神社(徳丸北野神社・赤塚諏訪神社)には五穀豊穣などを祈る行事「田遊び」が受け継がれています(国の重要無形民俗文化財)。各家庭などでもさまざまな年中行事や願かけが行われました。
本展では、収蔵品を中心に、板橋区域の民間信仰に関する資料をご紹介します。

板橋区立郷土資料館
Itabashi Historical Museum

7.10(土)~9.20(月・祝)

時 間 9時30分~17時(入館は16時30分まで)
休 館 月曜(ただし祝日は開館し翌平日が休館)
※8/9(月・祝)開館、翌10(火)休館。9/20(月・祝)開館。

人生という旅

民間信仰とは、「民間に伝承されている信仰」をいいます。その痕跡は、民具（生活用具）などに見ることができます。これらは、人間の文化・思想・時代背景などをひもとける資料でもあります。

こちらのページでは、板橋区域に存在した人々の一生や暮らしをテーマに関連資料をご紹介します。

■出産に霊験があるとされた塩竈大明神
掛軸「塩竈大明神」部分　近代

妊娠・出産は、命がけの一大事です。現在、それを支える社会体制として、病院が技術・器具などをとり揃え、母子の生命と向き合っています。

一方、昔は自宅などがその舞台でした。妊婦の陣痛が始まると、塩竈様の掛軸を床の間にかけ、安産を祈りました。また、短いロウソクに火を灯し、それが消えるまでに産めるよう願いました。

安産・繁栄・長寿

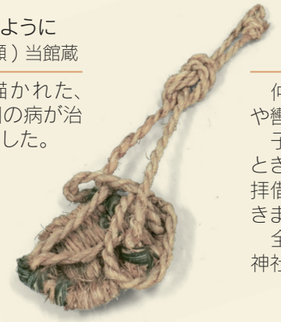
■子孫繁栄、育児への願い
小絵馬（鶏二羽雛三羽）
当館蔵

鶏や雛が描かれた絵馬は、赤ん坊の夜泣き止めや子宝祈願に際して奉納されることが多いものでした。

病気平癒

■眼がよくなりますように
絵馬（眼病平癒祈願）当館蔵

２つの「め」が描かれた、向かい目の絵馬。目の病が治るように奉納されました。



■疫病封じ
馬のわらじ　当館蔵

仲町の巻神社には、このような馬のわらじや巻が奉納されました。

子どもが百日咳や喘息などで苦しんでいるときは、奉納されている馬のわらじと麻糸を拝借し、わらじを神棚へ備え、麻糸を首へ巻きました。すると、病気が治ったといいます。

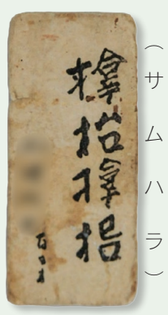
全快すると、新しい一足のわらじと麻糸を神社へ奉納しました。

弾丸よけ

■玉留め、弾止め、魂留め　千人針 昭和時代　当館蔵

弾丸よけのお守り。 動員された兵士の幸運を願って作られ、兵士が戦場で携帯しました。千人の女性が一人一つずつ玉留めを縫い、「弾止め」となるよう願いを込めました。体に魂を留める意図もあるといいます。

「虎は千里を走って千里を戻る」という言い伝えから、虎柄のものも作られました。また「死線（四銭）をくぐり、苦戦（九銭）を越える」ことを願い、五銭・十銭硬貨を縫い付けることもありました。



■まじない言葉「サムハラ」
サムハラ札　昭和時代　当館蔵
※一部加工

弾丸よけの護符。日清・日露戦争前後には、すでにこの言葉が広まっており、札などに書かれて兵士が携帯しました。

（サムハラ）

供養

■庶民によりそう地蔵
地蔵菩薩石像「真中童子 施主須崎半左衛門」享保８年（1723）　当館蔵

健康に長生きできるのは当然のことではありません。昔はそれが顕著で、特に乳幼児などの死亡率はとても高いものでした。

亡くなった子どもの供養では、地蔵の姿が多くみられます。地蔵は「大地を包蔵する」と意訳された存在で、広く人々を救済し、庶民の思いを引き受ける仏として、信仰を集めました。

■牛馬を守護する馬頭観音
馬頭観音石像　当館蔵

馬頭観音は、馬などを扱う人々からの信仰を集めました。

区内では、馬頭観音像や文字が刻まれた石碑が各地に建てられています。 板橋宿内の馬つなぎ場だった遍照寺でも馬の供養塔がみられます。

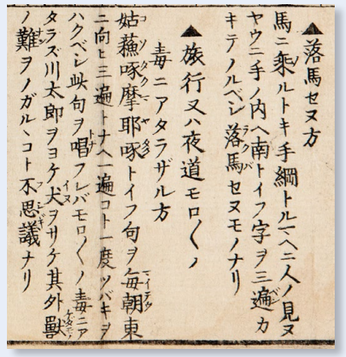
安全・無事

■「おいぬ様」への畏敬
武蔵国御嶽神社札（現．青梅市）
「大口真神」近代　当館蔵

「大口真神」とは狼の古名。日本武尊に道案内した狼が、御嶽山で魔物退治をする神になったとされます。江戸時代には、魔物・盗難・害獣除けの信仰を集めました。江戸時代後期に建てられた古民家（当館内）の戸口などにも貼られています。

■道中を無事に過ごすためのまじない
『大日本道中行程記』（部分）明和７年（1770）　当館蔵

江戸時代のガイドブック。現在の北海道から九州までの宿場や国境などをまとめたもの。道中の諸注意やまじないが記されています。



▲落馬セヌ方
馬ニ乗ルトキ手綱トルヽヘニ人ノ見ヌヤウニ手ノ内ヘ南トイフ字ヲ三遍カキテノルベシ落馬セヌモノナリ

▲旅行又ハ夜道モロ〳〵ノ毒ニアタラザル方
姑蘓啄摩耶啄トイフ句ヲ毎朝東ニ向ヒ三遍トナヘ一遍コトニ一度ツバキヲハクベシ此句ヲ唱フレバモロ〳〵ノ毒ニアタラズ川太郎ヲヨケ犬ヲサケ其外獣ノ難ヲノガルヽコト不思議ナリ

〈意味〉

▲落馬しない方法
馬に乗るとき手綱をとるまえに、人に見られないように、手の内側へ「南」という字を３べん書いて乗るべし。落馬しない。

▲旅行または夜道もろもろの毒にあたらない方法
姑蘓啄摩耶啄（コソタクマヤタク）という句を毎朝東に向かい、３べん唱え、１べんごとにツバを吐くべし。この句を唱えれば、もろもろの毒にあたらず、川太郎（カッパ）をよけ、犬をよけ、そのほか難をのがれられる。不思議なことだ。

■板橋宿で酒を呑む旅人
『吾嬬紀行』（部分）
文政７年（1827）　当館蔵
※大正10年（1912）翻刻

板橋宿は、旅人の無事を祝う出迎えや、無事を祈る見送りの場でもありました。このような場所を「サカムカエ」（酒迎え、境迎え）といいます。

この資料では、「いつまでもここにいたばし」（□部分）という洒落とともに、酒を楽しむ旅人の姿が見えます。

商売・出世

■遊女の参詣
「遍照寺参詣図」絵馬 複製　当館蔵
※原資料は遍照寺蔵

板橋宿・平尾の遊郭「千代本楼」の旦那と遊女一行の図。早春に、商売繁盛を願って遍照寺へ参詣し、その場面を描いて奉納したものと伝わります。

■立身出世
出世稲荷神社 祠・狐像・扁額　昭和時代
当館蔵

江戸時代、中山道板橋宿そばに加賀藩下屋敷が置かれました。その広大な土地と敷地内を流れる石神井川は、火薬製造に利用され、明治にはその跡地に板橋火薬製造所が開設されました。製造所はのちに東京第二陸軍造兵廠板橋工場となり、火薬製造は終戦まで続きました。

この祠は、その板橋工場内にあった出世稲荷神社のものです。出世稲荷は、各種産業の守護神として信仰を集めた神です。

■板橋遊郭の遊女
板橋遊郭遊女のガラス写真
近代　当館蔵

ガラス製。店先に掲示していたものと思われます。

四季のなかで－農耕・伝承・芸能－

板橋の「田遊び」

■予祝儀礼の一つ。予祝儀礼とは、年始に一年間の農作業を演じる模擬儀礼のこと。あらかじめ理想的に行っておくことで、そのとおりの結果（五穀豊穣や子孫繁栄）を期待する呪術行為です。

■板橋区では、徳丸北野神社と赤塚諏訪神社に伝わる田遊びが、ともに国の重要無形民俗文化財（昭和51年（1976）指定）、板橋区登録無形民俗文化財（昭和58年（1983）登録）となっています。

徳丸北野神社田遊び

徳丸6-34／毎年2月11日（旧暦正月11日）夜6時頃から

◉創始　長徳元年（995）という。
◉起源　京都北野天満宮の祭神を祀るため、徳丸に建立した天満宮の奉祝（謹み祝う）行事として行われた「田阿曽美之祭」という。

「刈るぞうれしき　そんぎりそんぎりそ　刈れよれ　刈れよれ　そんぎり　そんぎり」

■田遊び道具「太郎次」面　当館蔵

男性。安女の夫。黒い面で表現されます。

■田遊び道具「松・梅」　当館蔵

稲を表す、松・梅の枝。田遊びの終盤にこれを刈り取る所作（＝稲刈り）があります。紙に塗られた紅・墨・緑の色は、松竹梅を表すといわれます。

■田遊び道具「安女」面　当館蔵

女性。太郎次の妻。妊婦姿。白い面で表現されます。

太郎次・安女は田遊びの終盤に登場します。夫婦で踊り歩き、仲むつまじく抱き合います。これは稲の実りを予祝する所作です。

■写真　田遊び道具「よねぼう」　当館蔵

人形。田遊びの終盤に登場します。男性器が誇張されており、この人形にふれると子宝に恵まれるといわれます。

赤塚諏訪神社田遊び

大門11-1／毎年2月13日（旧暦正月13日）夜7時頃から

◉創始　不明　※「上世の祭式で埒もなき神事なれど、古風を失はずして今もとり行ふ事也（上代から伝わる古風な神事である）」との記載が、寛政6年（1794）の『四神地名録』にあり。
◉起源　不明

「ひらがさの　ひらがさの　五月女やあい」

■田遊び道具「ひらがさ」　当館蔵

早乙女（農作業に従事する女性）役の男児がかぶるもの。田遊びの序盤に、田に見立てた太鼓の方へ大声で呼ばれるときにかぶって登場します。

■田遊び道具「牛の面」　当館蔵

木製の面。これをつけた牛役が、田に見立てた太鼓のまわりで代かきの所作をします。代かきとは、水を入れた田の中で、土を細かく砕いてかき混ぜ、土の表面を平らにすること。牛馬に砕かせることもありました。

■田遊び道具「よねぼう」　当館蔵

人形。田遊びの終盤に登場します。二体が束ねられ「寿」の紙が貼られています。婦人を表し、子守りの形を表しているともいわれます。

■田遊びを描いた挿絵「赤塚村神事牛をひきまハす図」　齋藤鶴磯『武蔵野話』（部分）文政10年（1827）　当館蔵

牛の面をつけた牛役がみえます。江戸時代の地誌に描かれた、当時の田遊びのようすを表す挿絵です。

年中行事

■マユダマ（メエダマ）

正月十四日の行事。

■大晦日

しめなわなどを作って正月の準備をし、夜にうどんなどを食べて新しい年を迎え入れました。

■節分

立春の前日のこと。
ヤイカガシ（魚の頭を木の枝につけた飾り）を出入り口などに挿し、その臭いと葉のトゲで鬼の侵入を防ぎます。また、豆をまいて鬼を追い払い、家の中に福を招きました。

日曜寺節分会用枡
大正時代　当館蔵

ヤイカガシ（焼い嗅がし）
現代　個人蔵

■初午

二月の初の午の日。京都の伏見稲荷神社の神が降りた日だといい、この日に稲荷社を祭ります。太鼓を叩きながら家々を周り、さい銭をもらったといいます。

小児稲荷祭之図
当館蔵

■七五三（オトビキ）

氏神へ参詣する行事。七歳・五歳・三歳の男女が、それぞれ成長を感謝・奉告しました。

千歳飴袋
昭和時代　当館蔵

メーケ（カゴ）
昭和時代 当館蔵

■八日節句

セツガワリとも。
鬼や一つ目小僧などの魔物が来るといわれました。これを追い払うため、メーケ（目の粗いカゴ）を竹竿の先にかぶせて屋根のひさしの前に立てかけました。「目の多いメーケを見て、魔物が驚いて逃げる」と信じられたのです。

■荒神様

台所に祀られる竈の神。
10月31日に出雲へ発ち、11月30日に帰ってくるといわれます。お発ち・お帰りのときには団子や絵馬などを供えました。

荒神棚
当館蔵

■オヒナサマ

女の子が初めて迎える三月に、母親の実家や親戚などから人形が贈られました。一度にそろうように人物ごとに段数が振り分けられることもありました。そのお礼として、菱餅をつくってお返しすることもありました。

■月見

十五夜（仲秋の夜）に月を祭る行事。
月見団子、ススキ、栗、神酒などを供えました。
子どもたちは、他の家のお供え物をとって遊んだといいます。これを「月見盗み」といい、この日に限っては盗んでも構わない、また盗まれた方がいいともいわれました。

五月人形（神武天皇）
明治時代 当館蔵

■端午の節句

男の子が初めて迎える五月に、母親の実家や親戚などから人形、幟、鯉幟、掛軸などが贈られました。屋根には菖蒲や蓬などの香りの強い草を挿し、魔除けとしました。また、柏餅をつくり、菖蒲湯に浸かりました。

精霊流し迎えセット
昭和時代　当館蔵

■盆

盂蘭盆（うらぼんえ）の略。盂蘭盆とは、食物を祖先の霊や餓鬼に供え、冥福などを祈る行事。墓参りなどをして先祖の霊を迎え入れ、送るときはナスなどの乗り物をつくって供えました。

■七夕

星を祭る行事。天の川の両岸にある牽牛星と織女星が年に一度会う7月7日の夜に行います。
庭などに供物・葉竹を用意し、短冊に歌などを書いて飾りつけ書道や裁縫の上達を祈りました。藁やマコモで雌雄の馬をつくって飾る家もありました。

※所蔵記載のないものは当館年中行事の写真。

縁切榎

かつての中山道板橋宿そばにある榎のこと。(区登録記念物)

板橋区には、縁切榎という史跡があります。その名の通り、縁切りの願かけが行われる樹木で、区文化財に登録されています(記念物)。

当初、「榎(エンノキ)」と「槻(ケヤキ)」が中山道の「岩の坂」に植えられており、「えんつきいやの坂(＝縁尽き嫌な坂)」と呼ばれて、いつの頃からか嫁入・婿入行列に避けられたといいます。江戸時代にはすでに板橋の名所として知られ、幕末には皇女和宮一行が事前に迂回路をつくり、縁切榎を避けて将軍家へ嫁ぎました。

男女の縁切りのほか、「悪縁を切り良縁を結ぶ」とも信じられ、病気などとの悪縁切りや縁結び信仰の絵馬も多く奉納されました。火事や移転を経て、現在は3代目の縁切榎が信仰を集めています。

縁切榎図(部分)
大正6年(1917) 当館蔵

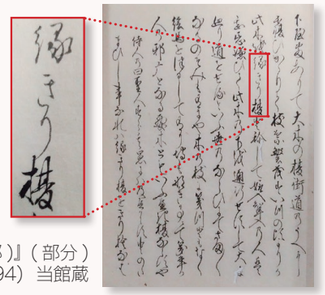
板橋の名所として

■いつの頃からか男女が避ける覆いかかる大木・「縁切榎」

寛政6年(1794)にまとめられた、江戸付近の地理の調査結果。地理学者・古川古松軒が、老中松平定信の命令を受け、現場で調査・取材を行ったときのものです。

下板橋宿部分に、次のような縁切榎の記述があります。

- 近藤氏の下屋敷にある
- いつの頃からか縁切榎と呼ばれ、嫁入り・婿入りの者は木の下を通らず迂回する
- 枝に多くの絵馬が吊るされている



『四神地名録(豊嶋郡)』(部分)
寛政6年(1794) 当館蔵

〈意訳〉

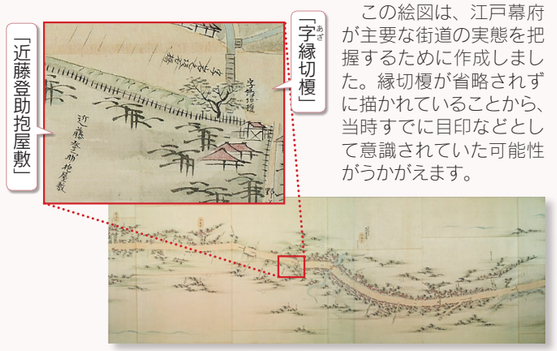
近藤氏の下屋敷があり、大木の榎が街道の上に覆いかかって枝葉を茂らせている。いつの頃よりかこの木を「縁切榎」と称して、嫁入・婿入の人はそれを忌み嫌い、この木の下を通行せず、大きく廻り道をするという。世の常として、さまざまなのぞみがあるのだろう。木の枝には、いくつもの絵馬を吊るしてある。とりとめがないので、長い間「人の邪魔となる悪い木」ともいうべき榎である。

〈翻刻〉

下屋敷ありて大木の榎街道のうえに覆ひかかりて枝葉繁茂す、いつの頃よりか此木を縁きり榎と称して嫁入聟入の人は其忌嫌ひて此木の下を通行せずして大に廻り道をせるといふ。世のならひにてさまざまなるのぞみも有にや木の枝に幾つともなく絵馬をつるしてあり。埒もなき事にて幾年か人の邪魔となる悪木ともいふべき榎ならずや、

■江戸幕府作成の絵図に描かれた、枝葉の茂る「縁切榎」

文化3年(1806)年の地図。縁切榎が枝葉の茂る姿で描かれています。江戸時代、縁切榎は旗本の近藤登之助という人物の屋敷地にあったとされています。この絵図では、それを示す「近藤登助抱屋敷」という文字も確認できます。



この絵図は、江戸幕府が主要な街道の実態を把握するために作成しました。縁切榎が省略されずに描かれていることから、当時すでに目印などとして意識されていた可能性がうかがえます。

中山道分間延絵図(「五海道其外分間絵図並見取絵図」十巻之内一)(部分) 文化3年(1806) 東京国立博物館蔵

■密かに飲ませた「縁切榎」

1814に記された紀行文※には、縁切榎の樹皮に関する次のような記述があります。

- 家に持ち帰って水から煎じて、相手に知られないように飲ませれば男女の縁が切れる。
- 別に煎じて酒と混ぜ、酒癖のある者に飲ませれば、忽然と酒を嫌う。

※十方庵敬順『遊歴雑記』

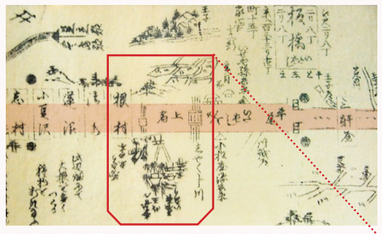
縁切榎樹片(部分)
当館蔵

はいだ樹皮を水などで煎じて飲ませることで、相手の体内へ縁切榎の効力を取り込ませるというまじないです。いずれも、相手の意思とは別に樹皮を密かに飲ませているようです。相手に知られないよう努めながら、自分の力のみでは叶わない事柄の好転を祈って縁切榎にすがり、心願成就後に感謝を示しています。縁切榎樹皮を秘薬とするまじないは昭和時代にもみられました。

■旅行ブーム下の名所・「縁切榎」

安政5年(1858)の道中案内図。旅行がブームとなった江戸時代後期のもので、旅人が携帯しました。

縁切榎は、中山道脇(西側)に描かれています。現在の3代目の縁切榎は、道を挟んだ向かい側(東側)に移転しています。



大城屋良助『五海道中細見記』(板橋部分)
安政5年(1858) 当館蔵

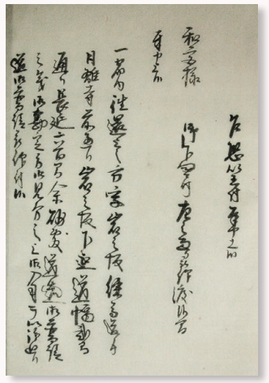
■和宮も避けた、中山道(別名・姫街道)の「縁切榎」

中山道は、京都から江戸へ嫁ぐ姫君らが通ることから姫街道とも呼ばれました。

幕末、将軍家茂へ嫁ぐ皇女和宮も中山道を通りました。このとき、「縁切榎を避けて迂回した」または「縁切榎に菰(布)をかぶせて前を通った」などの伝承が生まれました。

近年、この伝承を裏付ける資料が見つかりました。役人が現場を下調べし、「迂回路が必要である」と判断して行った工事の記録でした。

縁切榎の迂回路を進んだ和宮一行は、文久元年(1861)11月14日の午後5時頃、無事に板橋宿へ入り、脇本陣の飯田宇兵衛家に宿泊しました。この脇本陣家に工事記録が伝わっていました。



(上)和宮が縁切榎を迂回したという伝承を裏付けた工事記録
「和宮下向御用留」飯田侃家資料 文久元年(1861) 当館蔵

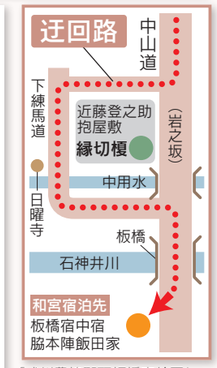
〈翻刻〉

和宮様
奉申上候
乍恐以書付奉申上候
御下向ニ付左之通り被仰渡候間
一、宿内往還上之方字岩之坂練馬道ゟ
日曜寺前通り岩之坂下迄幅弐間
通り長延六百間余砂敷道造御普請
之義御勘定方御見分之上御入用ヲ以御廻り
道御普請被仰付候

〈意訳〉

和宮様
恐れ乍ら書付を以て願い申し上げ奉ります。
の御下向につき、左の通り仰せ渡されましたので
申し上げ奉ります。
一、(板橋)宿内の往還(通り道)について。
「岩之坂」「練馬道」より「日曜寺」前を通り「岩の坂」下まで。
道幅2間(約3.6m)、長さ延べ600間あまり(約1.09km)の通り。
こちらに砂を敷き、道を造り、ご普請(工事)した件です。
お勘定方(財務役人)が、現場をお調べになった上で、
(道の工事が必要である)とご入用の判断をされたため、
これによってお廻り道のご普請を仰せ付けられました。

版画「内親王和宮様絲毛御車」(部分)
文久2年(1862) 当館蔵



「武州豊嶋郡下板橋宿絵図」
(国立国会図書館蔵)をもとに作成

■板橋宿の大火で類焼した「縁切榎」

明治17年(1884)、板橋宿で大火がおこりました。縁切榎も類焼し、かつて道の上を覆うほどだった大木は、焼けた古株へと姿を変貌させます。しかし、その後も撤去されずに留め置かれ、また絵馬や幟が奉納され、信仰の対象として在り続けました。

なお、昭和44年(1969)の撤去・移転後、初代の一部とされる樹片が当館の旧本館へ持ち込まれました。これが更に分けられ、現在は当館といたばし観光センター(板橋3-14-15)などに存在します。

表面の一部が黒く炭化した
縁切榎樹片(初代)当館蔵

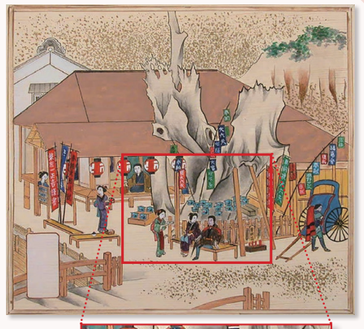
展示された縁切榎(初代)
「資料館だより 第14号」(部分)
昭和51年(1976)12月25日
板橋区立郷土資料館発行 当館蔵

■人々が集う「縁切榎」

明治18年(1885)年の絵馬。縁切榎付近に茶店、車、橋が描かれています。奉納された絵馬、賽銭箱、絵馬の販売台のようなものもみえます。

明治の大火前後から、縁切榎は「悪縁を切り良縁を結ぶ」という信仰を集めました。明治23年(1890)頃には、「信仰の仕方によっては縁結び榎」と大流行したといいます。

大火などでさびれ始めた板橋宿において、縁切榎は新たな利益を期待されました。



(上)「縁切榎茶屋風景図絵馬」
複製
当館蔵 ※原資料も当館蔵
(上図拡大)

縁切榎小絵馬 当館蔵

参拝者(女性)を描いたもの

参拝者(複数名)を描いたもの

お礼参りのもの。「大願成就」「御禮」「参拝」と記載。 昭和時代

53歳願主が53歳男性と40歳女性について願ったもの 昭和時代

50歳願主が51歳男性について願ったもの 昭和時代

縁結びを願ったもの
昭和時代

二代目「縁切榎」

大火後、初代縁切榎のそばに二代目が植えられました(植樹時期不明)。初代の幹とともに信仰され、大正時代には神道大成教の本尊とされました。大成教榎教会という組織が発足し、教会管理者・金井豊儀によって昭和初期まで守られました。(金井豊儀らの死後は榎大六天神奉賛会が管理)

大成教榎教会・
金井豊儀

大正時代の縁切榎

初代の幹と、2代目と思しき幹。2代目も「今は(略)相当な木になつた」といいます(『板橋区史』昭和29年)。

※いずれも『板橋町誌』大正13年(1924) 板橋新聞社 当館蔵